

平成 23 年度 大学職員情報化研究講習会～基礎講習コース～

(F-3) 到着!!大学救命チーム

関西外国語大学 出口友之 大阪学院大学 馬庭直美
東京女子大学 安田奈央 専修大学 千田和秀
大東文化大学 進士幸 京都産業大学 上田美穂 名城大学 古市有紀

タイトル「STOP 退学 ～ギャップ解消とモチベーションアップ～」

・課題認識

学生の退学についてテーマを選定した。その背景として、退学を選択する学生で、将来を考え、大学とは別の進路を決断する場合は、応援していくべきであると考えますが、それ以外の理由の一つに、「修学意志を喪失」して退学していく学生もいる。現実問題として、学生が大学生活の中で、目標を見つけることができないことや、授業のギャップ、モチベーション等の問題が生じている。この問題を解決することは、現在の大学に求められているものではないだろうか。

・討議内容

上記で述べた「修学意志の喪失」が原因で退学を決める学生の中では、どのような問題が生じているのであろうか。そのことについて議論した結果、1つ目の原因として授業のギャップが考えられる。これは、学生が修学意欲をもって授業に挑んだ結果、自分が考えていたものと違ったこと、また大教室での授業など、高校と大学の違いにギャップを感じ、戸惑いを感じてしまうことが理由と考えられる。

2つ目の原因として学生のモチベーションの問題が挙げられる。不本意入学で入った学生は特に、大学への期待が薄く、入学時から修学意欲を削がれている場合が多い。またそのモチベーションには大学でどのようにコミュニケーションを行っていくかも関係すると考える。つまり、大学という広い場所で自分の存在意義を感じられなくなってしまう学生も少なくなく、孤立してしまうことがマイナスに働き、大学に来ること自体が困難であると考える可能性が考えられる。

・提案内容

今回、「修学意志の喪失」についてその原因は何かを考えた。その原因に対しての支援策をそれぞれ提案した。

1つ目の原因は、授業に対するギャップをどう埋めるかであった。この原因に対して、3つの支援策を提案した。1つ目は「シラバス WEB 履修リンクシステムの提案」である。ギャップが生じる要因の1つとして、シラバスの理解不足が考えられる。シラバスをよく読まずに登録し、「こんなはずじゃなかった」と感じてしまう学生を減少させるには、シラバスを読むことを必須条件にすることが効果的である。具体的には、WEB 履修登録の際、授

業を登録しようとするシラバス画面に飛び、「そのシラバスを読んだ末に登録する」という内容に同意ボタンを押さないと、登録できないシステムを作成する。一度、学生に自分の意志で授業を履修するという認識をさせることがこのシステムの目的である。

2つ目は、第1回授業終了後、シラバスと授業が合致しているかの確認を行う。確認作業があることで、履修した授業に対して自分の責任や授業を通しての目的が明らかになり、本当に学びたい授業を選択する学生が増加することが考えられる。また、先生の外的要因として、学生が最終の授業終了後に授業評価を行う。その結果によっては、評価がよくない先生に対し、評価のいい先生の授業を見学することを推奨するなど、先生に対しても一人よがりな授業ではなく、学生に対して開かれた授業を行うことを求める。

3つ目に履修取消者数のカウントを行う。これは上記に述べたシステムがうまく働いているのか、つまり学生がシラバスをきちんと読んでから授業の登録を行っているかの確認が可能である。シラバスを読んで登録した学生であれば、授業を途中で中止したいと考える確率は低くなるからである。シラバスの内容がきちんと授業で行われているのかという、シラバスの質保証の問題は次回の課題とした。

2つ目の原因は学生のモチベーション、コミュニケーションの問題であった。この問題に対し、3つの支援策を提案した。1つ目は、身近な目標を持つことを目的としており、友人関係を作ることが挙げられる。大学に来る目的は、学ぶことに加え、仲間を作ることも大切であると考え。友達作りが苦手な学生のために、学生相談員の設置を強く望む。彼らと学生が接することで人と関わることによるポジティブな経験を積み重ねれば、積極的な人材が育成されると考える。また、彼らの存在が、「学生の居場所」になれば、大学に来ることのモチベーションにつながると考えた。学生相談員の理想は、友人のような存在でもあり、話しやすい先輩のような存在である。また、孤独を感じる学生にとって、心のよりどころになる可能性も考えられる。学生が相談員との経験を機に、自分も相談員になりたいと感じてくれば、バトン形式につなげていくことができる。学生同士がお互い助けあうことを最終的な目標とする。2つ目は、授業に関することである。1つの授業を通してどのような理解をしたいか、どうなりたいかの目標を設定させる。それを紙に書くことによって、学生自身が何をすべきかを認識すれば、その結果行動する可能性が高くなる。フィードバックは個人内で成績等の結果を見て行ってもらい、自分の行動と結果がどのように結びつくのかを理解してもらうことが目的である。3つ目は、将来的な目標をもってもらうことを目的としている。具体的には、自己啓発冊子を配布し、学生が見たいときはいつでもその冊子を見られるような状況を作り上げる。

以上に述べた支援策を導入することで、学生の授業に対するギャップ解消、学生のモチベーションアップ、そしてコミュニケーションを行うことによる存在価値が確立できるという利点がある。学生の自主性を尊重し、育み社会に輩出することが、今の大学に求められていることではないだろうか。このように成長した学生は社会に出た後も、自ら人的ネットワークを広げ、自分の世界を広げていくことが可能であると考え。

問題と考えた「退学」を止める支援策は、学生全体の質の向上にもつながることが考えられる。

以上